

禪の友

—Zen no Tomo—

5

May 2021





ご本山だより 大本山永平寺 【掃き作務】

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三二〇二



地を這う美しい緑の瑞々しさが、目に眩しい季節となりました。

伽藍がらんの周りには杉の巨木が茂っており、修行僧たちは広い境内に落ちている杉の葉を掃き続けます。

つい先日掃いたはずの場所にまた同じように杉の葉が落ちていたので、

坐禅を組むのと同様に作務さむは大切な修行の一部です。皆、黙々と下を向き細かいところに挟まったものまできれいに取り除きます。掃き終わった後の達成感を感じる間もなく次の場所、次の作務へと移っていきます。

『心取捨せず、心名利みよ無きなり』と道元禅師さまは『学道用心集がくどうしんしゅう』の中でお示しです。

僧堂生活の中でどう生きるのか？

どう暮らすのか？ という問いに対して、仏道修行というものは自分の好き嫌いを一切挟まないと仰っており、それは過去の名誉だとか将来の利益だとかも計算に入れない掛値のない今を行じ続けることに他なりません。厳しい生活環境、また慣れない集団生活で皆が忍苦の中にあります。そのような中で、の僅かなこだわりや自分勝手な判断は修行の滞りとなりかねません。それぞれが与えられた役割を全うすることは、それが些細なことであったとしても損得を超えた仏の行いに他ならないのです。

作務の終わった境内は、掃き清められた喜びに満ち溢れています。



ご本山だより 大本山總持寺

【一味同心】

大本山總持寺

☎〇四五・五八一・六〇二一



皐月五月、總持寺境内の青々と茂った木々の間を爽やかな風が吹き抜けていきます。

「薫風何処来たり、我が庭前の樹を吹く」

明時代の政治家、于謙の詩を思い出します。

總持寺本山僧堂では四月より夏安居制中という一〇〇日間の修行期間に入っております。

安居の始まりは釈尊在世より始まったものです。インドでは雨期に入ると修行者は遊行をやめて精舎にこもって修行に専念しました。そしてこの期間は草木虫類を傷つけるので、釈尊は雨期の止住を規定したのです。これが安居の始まりです。

特に本山では五月十三日から十七日

にかけて「制中五則」という大切な行持が行われます。その五日目には「首座法戦式」のクライマックスを迎えます。大勢の修行僧の先頭に立って指導するリーダーを「首座」と呼びます。

当日は江川禅師の命を受けて大勢の修行僧と禅問答を交わします。この法戦式では首座は修行で培った全力量を発揮し、緊張感の漲る場面が展開されるのです。そして、これから更に首座を中心として修行僧が皆同じ方向を向き、協力し合うことで乳水のように行きます。瑩山禅師は『洞谷記』で「縦使、難値難遇の事有るとも、必ず和合和睦の思を生ずべし」と示されたようにその協調性によって「一味同心」が生まれ、一〇〇日間の夏安居制中が成就するのです。

選・坊城俊樹

鱒焼き悠々自適とも云へず

秋田県 伊藤 剛司

評「ハタハタ」は日本海の冬の特産。なかなかの高級魚である。焼いても美味、鍋にしても美味。だからといってご本人は、悠々自適とも言えないのだなあとは呟いている。「鱒」との対比が絶妙である。これが高価な海胆や越前蟹だとある意味付き過ぎでつまらぬ。

春昼や鼠小僧の墓に猫

千葉県 長澤 さよみ

評 両国にある回向院は鼠小僧次郎吉の墓があることで有名である。この寺はいわば江戸の庶民とともに歩んで来たと言えるだろう。句としてはむしろ「鼠小僧」の墓に「猫」が居るから面白いのだが、私がかつて行った時もしか猫が居たような記憶がある。

◆ 独り居の香りの余る柚湯かな

静岡県 石濱 徹

◆ 傾きし紙びな立てし小さき手

東京都 村山 千代子

◆ 寒明けて鬼の背中に豆の跡

静岡県 市村 知久

◆ 飾らねば泣くてふ雛を飾りけり

山口県 御江 恭子

◆ 暗黒の空の隙漕ぐ冬の月

岩手県 関合 新一

◆ 藁缶噴く集会場の古曆

東京都 友野 瞳

◆ 半月は子規の横顔松の内

愛媛県 井上 征郎

◆ 餅花を炒れば黒文字香り立つ

奈良県 竹村 和成

◆ 街の灯の遠きまたたき春隣

滋賀県 五十嵐 勉

◆ 寒といふ金属音の響きあり

大阪府 花谷 広文

選者吟

龍天に登るや喜劇役者の死

俊樹

作句小見 春には龍もまた天に登るといふ空想の季節。何やら不可思議な面白さがある。そして「志村けん」のコロナウイルスによる死は人々に特別な哀惜の情を持って迎えられた。俳句では悲しい時に寂しい季節を取り合わせるとそれを「付き過ぎ」と言う。

選・長澤 ちづ

伝へ聞くみみづく峠遠澄みて今朝雪白し
その耳の辺に

北海道 菅原 三江子

評 みみづく峠は作者の言葉によると「ちいさな峠が重なるように並ぶ」ところらしい。おとぎ話に出てきそうな峠の名だが、昔は軍用道路でもあったとか。遠澄む峠を見やりつつ時もまた遠く彼方にはこんでいる。

訪ふことも訪はるるもなき元朝や娘のプ
レゼント靴下温し

静岡県 杉原 氏子

評 コロナ禍の中に迎えた新年は、人の行き来が少ない静けさのなか特別な緊張感があった。そんな異常なお正月も肉親からの贈りものの靴下の温かさで救われている作者がいる。

◆ 暗示めくこと重なりし一日の夜の大浴場に相客は無し

兵庫県 前田 あつ子

◆ 紅玉の如き朝日を左手で掴みて歩む雪晴れの道

福島県 佐藤 忠

◆ 笑はぬを笑はさむとする藝ありし客と一緒に嗤ふ芸あり

島根県 横山 豪吾

◆ 眼閉じればたらちねの母あらわれて雪降り積もる家にわれ呼ぶ

福島県 大槻 弘

◆ 凍み溶けて銀行までの雪道を轍伝いに往復をせり

鳥取県 山本 浩一

◆ 年代わり身体髪膚毀傷なし七周期目の千支を賜り

秋田県 小田嶋 恭葉

◆ 雪の道月の明かりが温かい新調長靴にガシガシ歩く

秋田県 小松 紀子

◆ 来る人も行くあてもなく穏やかに令和三年三が日過ぐ

静岡県 高尾 善五

◆ ほつほつと蓄ふくらむ桜桃の小枝供へむ子の命日に

広島県 徳永 進一郎

◆ おかいこを鼻にのつけて笑わせし亡母の想い出よみがえるなり

北海道 菊池 和子

選者詠

ほの光り森のきのこの吐く胞子空にのぼりて

雨降らすとか

ちづ

作歌小見

この冬は大雪に見舞われた地域が多いと聞きます。目には美しい雪ですが、雪国の暮らしは大変なことと思います。小松さんの一首、上の句の濃やかな温かさの捉え方と下の句の逞しさのバランスが微妙な面白さを醸し出しています。